

(図中の口上)

上方おもてへ
かみがた

たち帰り
かへ

御名残の
なごり

口上 中村翫雀

「恐ながら口上を以て是より申上るさて不束なる私事
おそれ これ ふつつか

あつき御鬘扇を蒙り升て成駒々々の御声掛り
ひみき かっふ なりこま く こゑがく

毎度大人大繁昌外聞実義とり交て有がたうムり升
まいど はんじやうがわいぶんじつき ませ

さほど御恩の御当地ゆへ舞台を勤め升るうちはいつかな
おん たうち ぶたい つと

動かぬ存寄でをり升たる処 抛なく此たびちよつと
うご ぞんじより ところよなところ この

上方表へ立歸りに参らねばならぬ一儀出来さまさま
かみがたおもて たちがへ まゐ いちぎしゆつたい

断り申し升てもなか／＼夫では済升ぬ訳がら故に御別
ことは それ すみ わけ

れの涙を押へちか／＼に出立仕り升るやうにムり升る
なみだ おさ しゆつたつ

されど忘れぬ御江戸の御恩その用向の済しだい
わす しょん せいごん ようむき すみ

夜を日に嗣で直さまに帰参のをりは相替らず御ひみき
よ ひ ついで すく きさん あひかは

のほど幾重にも願ひ上奉り升るその為まづは御
いくへ ため

名残の口上さやうに御聞すみ下されませう
なごり きき

病気全快
びょうきぜんくわい

出勤の口上

市村家橘

「さて私事近来はとかく病に閉籠られ皆々様へ

御目通りも糸路の橋の中絶て先ぐにては

世になき人の数に入たのいらぬのと御評判さへ

ありとの事去ながら私風情御ひるきあつき故

なりやこそ夫ほどまでの御噂身にとり升ていか

はかり有がたう存し升ゆゑいかにもして今一度

御目見をいたしたく種々祈る神仏その御利益に

薬のきゝめはやすがくと快く出勤仕升やうに

ムリ升就まして此たひは一際出情仕り相勤め

升るやうにムリ升ればその狂言の初日から永当く

御光来名にたちばなの御ひるきを

隅からすみまですくりつと願ひあげ

奉り升る